

# ホトギス

八月号

ホトギス  
昭和二十五年八月  
平成二十五年八月  
日曜朝刊  
第一二七号



## 俳句随想〔四百二十二〕

汀子

「ホトトギス」「天地有情」への投句された方より質問の手紙がホトトギス社に届き、転送されて来た。五月号の「天地有情」で二句掲載された作者の句が添削されていたことについての質問であった。掲載した原句は「歳晩の道に毀たる植木鉢」で、掲載されたのは「歳晩の道に毀ちたる植木鉢」であった。毀つ（こぼつ）と読めば字余りになる。

私は「毀たる」はことばの響きがあまりよくないと思った。「毀ちたる」ならばまだ響きはよくなると思つたが、「毀ちちたる」としななければと思つた。俳句は耳から聞いて心地よい響きが欲しい。もし作者が「毀ちたる」としたいならば、私はこの句は取らないであろう。私が添削した一句は字余りとなつた。ならば、「歳晩の道毀ちたる植木鉢」と「に」を消すべきだつた。そうすると、作者が手に持っている植木鉢が落ちて毀れたという解釈になる。作者の作つた説明が送られてきたのを見ると、自分がおとしたのではなぐすでに毀ちれていたものだとの説明があつた。俳句は短い詩である。必ずしも作つた本人の意図と選者、読者の解釈が同じとは限らない。それ故、俳句は広い解釈、広い世界が相手に伝わる。作者と選者が同じ解釈が出来るに越したことはない。俳句の長所と俳句の欠点を見たこの句の作者からの手紙であつた。俳句は沢山作つて沢山捨てる。と言われている。しかし、一句の作品に対して執着することもいい勉強になるとつくづく思う作者からのお手紙であつた。

# 句日記 汀子

平成二十八年八月一日 ロイヤル俳壇

予定みな仕上げて汗の納まりぬ山を去るとき蝸に心置く星月夜期待通りに行かずとも乗り越えて来し思ひありはや文月

八月七日 下萌句会

八月の空に流るる雲早し稲妻の一人の夜でありしこと新涼の木陰に一歩二歩三

立秋と聞けばくつろぐ心かな対談の済みくつろげば桐一葉

八月九日 大阪倶楽部  
立秋と思ひし油断ありしことよく晴れてをりしを告ぐる秋の蟬朝顔に従ふ一と日の始まりぬ駐車して会場までの秋の蟬朝顔の萎えてをりたる旅疲れ

八月九日 綿業倶楽部

連組みで踊りし若さなつかしく気持だけ踊つてをりぬ阿波踊もう足のついて行けざる阿波踊追悼文書きはじめたる残暑かな

八月十一日 清交社

山の日と聞けば聞くほどそれらしくこの残暑乗り越えゆかん心あり又同じ子供が走る走馬燈

いくたびも庭に出てみる残暑かな朝顔や今日の外出はお昼から盆休 稿債に立ち向ふべく

八月十六日 有恒俳句会

旅の帰路花火終つてをりにけり家居より旅多き秋なりしかな水引の花の静けさ活けらるる文月の走り出したる時間かな忘れぬし花火の夜でありしこと山の秋夫逝きてより訪はぬまま

八月十六日 無名会

新涼やいつか戻つてぬし元気桐一葉又一葉庭賑はしや新涼の風にあづけてゐる家居みちのくの旅新涼の期待もて又一つ増えし蕾よ女王花一日に二つの句会秋涼し新涼と思へば風もそれらしく

八月十七日 夏潮句会

稿債をかかへ文月となりにけりみちのくの旅へ心を置く文月なほ一花今宵待ちたる女王花季節感秋へずれ込む花水過ぎ易き文月の家居心して

八月十九日 アネモネ句会

新涼を纏ひたるより旅衣人の輪を大切にして秋涼し新涼の旅の輪に入る一人かな

新涼をいざなふ雨を待つことも新涼の風に輪となり列となる

八月二十日 東北ホトトギス俳句大会前日句会

新涼の雨の東京発ちて来しみちのくの秋は快晴なりしこと亡き人を偲ぶことより奥の秋

八月二十一日 東北ホトトギス同人会

新涼に次々生れゆく会話祝の秋ロビーの混んでをりしこと東京へ雨置いて来しホ句の秋

八月二十一日 東北ホトトギス俳句大会

朝月の欠けて満つれば仲秋に快晴といふみちのくへ旅の秋爽やかに覚めて旅路の二日目に

八月二十六日 時雨句会

雑踏を抜けて又抜け花火の夜刻々と遅々と秋めく日はそこに水引の花の省略活けらるる何よりも秋めく旅でありしこと台風の仔細聞きつつ旅半ば雑踏に花火の余韻なかりけり目立たざる水引の花目立ちをり

八月二十七日 ホトトギス社吟行会

会場の明るき秋の灯かな秋めくやオリンピックは四年先一人又一人集へり爽やかに東京は広し迷路を巡る秋又使ふ秋の扇でありしこと

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成二十八年八月三日 カトリック新聞選者時

祈ること願ふことこの夕焼に

八月四日 蕉心会

夕立を期待してゐる昼下り  
この空もこの川風も秋近し  
咲き継ぎて晩夏の色や時計草  
海猫の猫撫で声といふ暑さ  
曳かれゆくモーターボート故障中  
蕉像の不機嫌さうな暑さかな  
日焼顔あんさんどなたはんどすえ  
青空に吸ひ上げられし雲の峰  
八月六日 鬼貫顕彰俳句大会

八月七日 野分会芦屋例会

故郷に句座てふ縁原爆忌  
山の日や一番欲しきもの捧げ  
そこに山あるから山の日を祝ふ  
八月七日 青嵐会芦屋例会  
流灯の微笑むやうに去りゆけり  
銀漢を抱へ上げたる親三瓶

八月八日 朝エカルチャー若草句会

国背負ひ民を背負ひて生身魂  
西瓜食む種を飛ばせし昔かな  
宮相撲千年を経し土俵とや

八月十一日 土筆会

運転は唯一の趣味生身魂  
汀子句碑文字くつきりと星月夜  
星月夜三瓶の夜を欺かず  
競ふこと忘れて秋の蟬となる  
時惜み命惜みて秋の蟬

八月十五日 北國文芸選者時

誌齡祝ぐ音を奏でし大花火

八月十八日 登高会

木槿垣街の喧噪吸ひ込みて  
門火焚く闇の走つてをりにけり  
早く来よ遅く帰れと門火焚く

八月二十一日 東北ホトギス俳句大会

初紅葉して城跡といふ威厳  
城跡へ登る新涼への一步  
天守なき城の盛衰新松子  
現代と古代を繋ぐ城残暑  
説明は秋田小町や灯下親し

八月二十三日 若水句会

雲脱いで蛸を着る三瓶かな  
西瓜食ぶ縁側といふ別世界  
接待や代替りせし寺静か  
六甲の蝸に標高を知る  
段葛抜け寿福寺の接待へ

八月二十四日 目黒学園句会

親三瓶子三瓶銀漢に疎む  
嫁ぎ行くつまくれなみに見送られ  
鳳仙花紅に季節を統べられて  
銀漢の被さつて来る三瓶の夜  
みちのくの残暑大東京の処暑  
みちのくへ残暑を連れて行く旅路  
銀漢に整へられてゆく星座

八月二十七日 ホトギス社吟行会

颯風の近付いて来る首都の黙  
露けしや東大卒で独身で  
戦没者慰霊碑掠め一葉落つ  
新涼の風はドームの傾斜より  
蚯蚓鳴くビル縫ふジェットコースター

八月二十八日 青嵐会東京例会

新涼の都心嵐はすぐ其処に  
電波塔赤く颯風待ち受ける  
秋涼し猫によく会ふ日なりけり  
花木槿一本に首都目覚めゆく

八月二十八日 野分会東京例会

刀豆を差して忍者になり切る子  
山の日や大江戸富士の懐に  
山の日や富嶽天辺揺する風  
八月三十一日 夢三忌全国俳句大会前日句会  
温泉の町の金風日差裏返す  
初紅葉して蒼天に紛れざる  
石段の文字躍らせて秋涼し

# 雑詠

## 廣太郎 選

霞むだけ霞み心に富士の位置 東京 河野美奇  
 蝶々と走るみどり兎危なかし 同  
 野良猫と並び寝そべり蝶の昼 同  
 着ぐるみの頭を取りて花人に 渋川 山本素竹  
 大気より軽くなりたる石鹼玉 同  
 寝転んで足の先出る花筵 同  
 初桜たつた一輪てふ風情 神戸 和田華凜  
 救命具腰に付けもし花衣 同  
 満ちるとは花にもありて芦屋川 同  
 校門に残る瓦礫や卒業す 熊本 岩町中正  
 瓦礫野に土筆を摘んでゐたりけり 同  
 鳥雲に入る少年の一人旅 同  
 暖かし手を握りては語りては 神戸 山田佳乃  
 春愁や時計の針の止まりし夜 同  
 申さして顔失ひし目刺かな 同  
 あやふやかな気温重ねて仲春に 東京 橋本くに彦  
 餌取られ針先春光釣つてをり 同  
 空振りの釣竿突く春の空 同

早立ちの春寒ほどけきし旅路 長岡 安原 葉  
 春光のベンチが待つてをりし園 同  
 落第も気にせざる子に育ちけり 同  
 吊橋を十歩で返し冴返る 龍ヶ崎 今橋眞理子  
 青空の隙間よりふと春の雪 同  
 日ざしより風にほどけてゆく木の芽 同  
 春宵やとうに忘れしことをふと 香川 湯川 雅  
 春陰や沖不確かといふ愁ひ 同  
 春愁をごましてゐる瞳かな 同  
 この国に翁ありけり国栖の奏 神戸 後藤比奈夫  
 神饅の毛瀾や土毛や国栖はよき 同  
 遠景の塔を隠して大牡丹 同  
 能面の面差に蟻出て来る 福山 竹下陶子  
 恋猫の帰りを待てる女かな 同  
 老僧の愛猫恋に狂ひたる 同  
 あたたかや力士は神の土まみれ 奈良 古賀しづれ  
 暖かや力士に土俵てふ無限 同  
 草芳し鬚なき四股名なき若衆 同  
 濠の名に偲ぶ江戸の世鳥曇 東京 大久保白村  
 春風や虚子の闘志を継ぎしビル 同  
 土曜日には暗し余寒の事務所ビル 同  
 三文の損を承知の朝寝かな 松本 唐澤春城  
 椿寿忌や忘るる勿れこの一句 同  
 咲き満ちし花に疎らな家族づれ 同

# 雑詠句評（七月号より）

むつみ・とほ歩・眞理子  
中正・葉・憲明  
保佳・静龍・肖子  
廣太郎

一般的には、その年初めての買物は、何かうきうきした気分がないところに、仄々とした愛情を感じる。仏壇や神棚へ供える花とも考えられるが、故人も一緒に祝う正月独特の落ち着いた雰囲気も見取れる句である。（廣太郎）

## 沖霞めくれ出で来し漁舟 香川 湯川 雅

霞が辺り一面を覆っている穏やかな海の光景。

霞以外、何にも見えない。

と、突然、いさり舟が出現したのである。

徐々に見え来たのではない。

めくれ出で来しの措辞が、この句の命である。（とほ歩）

沖一面に霞が掛かっていて、視界が狭くなっている。しかしだんだん霞も薄れてゆく。それを「めくれ」と表現したところが何とも詩的である。そしてそこから現れるのが、タンカー等の巨船ではなく漁舟である。何か日本の原風景が垣間見られるような風情を感じる句である。（廣太郎）〈以下略〉

## 買初に供華を加へて帰り来し 相模原 木村享史

「買初」は文字通り、正月に入って初めて物を買うことである。正月に新しい気分で使う物へ着る物な年末からあれこれ心づもりをするものである。だからこそ亡き奥様への初買いも心づもりの一つであり「加へて」とはあるが、当然「供華」も予定の一つである。奥様への思いの深さは以前にも俳句で拝見したことがあるが、「買初」には絶対に忘れてはならない奥様への「供華」なのである。作者だからこそ「供華を加へて」の措辞の深さが読み手にも濃く伝わる。（むつみ）

天地有情

鍬弾く低き日差に冬耕す 東京 稲畑廣太郎  
 水に浮くものを灯して冬紅葉 同  
 そんな気にさせ太陽春近し 相模原 木村享史  
 好きだった仏に二つ桜餅 同  
 先づ父の墓に卒業証書見せ 東京 河野美奇  
 白椿次々ふゝみ五色とは 同  
 福は内省略鬼は外ばかり 神戸 後藤比奈夫  
 受けてみよ上寿の老の打つ豆ぞ 同  
 あたたかや石にも禅の心あり 同 和田華凜  
 閉ぢあれば開きたくなる春障子 同  
 速度上ぐ遅延列車や山笑ふ 長岡 安原 葉  
 卒業の友の共なる涙かな 同  
 花の雲若草山へつらねたる 神戸 三村純也  
 咲き満ちて浮き上がりたる桜かな 同  
 両の手に囁のあふれんばかり 熊本 岩岡中正  
 ふるさとは天上にあり囁れる 同  
 出不精を連れ出してゐる春日かな 仙台 赤川誓城  
 温みたる水滴傾げ墨を磨る 同

菜の花や嘉兵衛青嵐顕彰地 神戸 千原叡子  
 春寒を弾き返せる海の綺羅 同  
 かき氷幼きころのいちご色 福山 竹下陶子  
 ものの無き頃の夜なべの母なりし 同  
 被災地に不明者いまも涅槃西風 金沢 藤浦昭代  
 貝寄風や声なき声を聞く汀 同  
 枯れてゆく喜びといふものあり 群馬 中杉隆世  
 永き日の燃え尽くるとき来るべし 同  
 誰もぬぬことを確かめ半仙戯 神戸 浜崎素粒子  
 恋猫の前をゆつくり人歩く 同  
 日本を留守にしてゐし花十日 東京 今井千鶴子  
 みよし野の花の一夜の物語 同  
 且脚伸ぶ夕べの心穏やかに 吹田 大橋 暁  
 犬ふぐり囁き合うてゐるごとし 同  
 初花のちよつと足踏みする日和 龍ヶ崎 今橋眞理守  
 海よりも菜の花の黄の光る時 同  
 御用邸の雛に昭和をしのびつつ 東京 山田閨子  
 虚子の忌のほどなく雨の落椿 同

花子選